

運動部活動における集団凝集性と指導者の指導方針の関係について

多田 省吾(島根大学大学院)

1. 緒言

本研究では、指導者の指導方針、集団凝集性、競技成績、充実感を調査し、その関係を明らかにすることにより、顧問教員の指導方針が、運動部活動に与える影響を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 対象

島根県高等学校テニス部男女計 30 チームに所属する指導者 29 名、選手 236 名から協力を得た。

2. 調査手順

大会前日、調査内容を説明し、監督に研究趣旨を説明した後、調査協力の了承を得て、質問用紙を手渡し配布した。各チームの監督から選手に研究趣旨を説明してもらい、同意を得たうえで回答してもらい、監督を通じて回収した。

3. 調査内容

3-1 指導者 属性項目(学校、年齢、性別)

・指導方針：スポーツマネジメント自己評価尺度(8因子、28項目、7件法；長澤・間野2011)を用いた。

「観察」	全体像を把握することを重要視する。
「モラル」	基本的な生活習慣から規律を重要視している。
「コミュニケーション」	選手との関係やつながりを持つ内容を重要視している。
「啓発」	主体性を引き出す指導を重要視している。
「戦略」	専門的な戦術・戦略の指導を重要視している。
「動機づけ」	長期的な目標・モチベーションを維持させる内容を重要視している。
「基本練習」	専門的な基礎の指導を重要視している。
「組織形成」	スタッフに関係することを重要視している。

図1 スポーツマネジメント自己評価尺度測定項目

3-2 選手 属性項目(学校、学年、性別)

・集団凝集性：集団環境質問票(内田ら2014)を使用した。個人-社会凝集性:ATG-S、個人-課題凝集性:ATG-T、集団-社会凝集性:GI-S、集団-課題凝集性:GI-Tの4因子から測定する尺度である。

・充実感：運動部活動の意義に基づき質問項目を作成した。全7項目で9件法によって回答を求めた。

III. 結果

1. 充実感の構造

主因子法によって因子分析を行った。潜在的な要因を抽出することはできず、1因子として捉えた。

2. 学年別、性別に見た集団凝集性と充実感

男女間に有意な差はない。学年間では、ATG-S、ATG-

T、GI-S、充実感に有意な差がみられ、いずれも2年生に比べ1年生が高い。(図2)

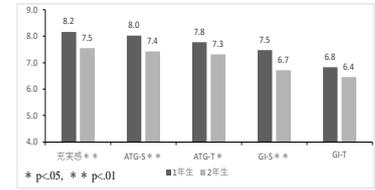


図2 集団凝集性と充実感の学年での比較

3. 集団凝集性と充実感

充実感に対してATG-S、ATG-T、GI-Sは、プラスの影響を与え、GI-Tは、マイナスの影響を与えることが分かった。

4. 集団凝集性と競技成績

団体戦でのチーム順位を競技成績とした。ATG-T、GI-Tは、競技成績を上げ、ATG-Sでは、競技成績を下げる影響を与えることが明らかとなった。

5. 指導者の指導方針と集団凝集性

8因子毎に高・中・低群の3群に分類し、一元配置分散分析を行った。モラル、観察、啓発、戦略、組織形成の指導方針によって集団凝集性の各因子に一部影響を与えることが証明された。

IV. 結語

指導者の指導方針は、集団凝集性の各因子に与える影響に特徴を持ち、集団凝集性の各因子は、充実感、競技成績に与える影響に違いがある。(図4)

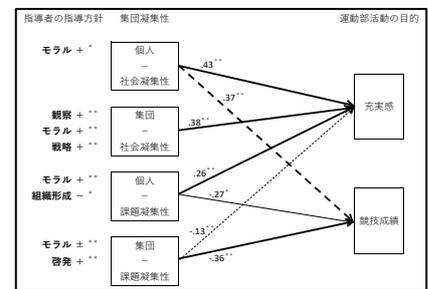


図3 指導方針と集団凝集性および充実感・競技成績との関係

以上の結果と構成員の考えをもとに指導方針を定めることで、部活動がより意義深いものになると考えられる。

V. 参考文献

- 長澤淑恵・間野義之(2011)スポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文.
- 内田遼介・町田萌・土屋裕睦・釘原直樹(2014)スポーツ集団効力感尺度の改訂・邦訳と構成概念妥当性の検討. 体育学研究, 59;841-854.